中日新聞

エンタ目

■ 映画『CHAIN／チェイン』■

物語追わず 画面凝視して

仙頭 武則

映画に「物語は映っていない」。映っていないストーリーの展開を予測して、映画の幕が開くと「それで、どうなるのだろう」とスイッチが作動し、実は「見ていない」。

大画面に映る人物の繊細なしぐさ、あるいは躍動感に満ちあふれた動き、遠くに映る人、建物、自然の風景。全てをめでるように凝視していれば、より多くの情報を視覚と聴覚から吸収することができれば、思いもかけぬ場面で言葉にすることが容易ではない感情が湧き上がり、あふれ出す。その感情の連続あるいは連鎖こそが、映画にだけ許された「映る」物語だとあえて言おう。

十七日に名古屋・新栄の名演小劇場で公開される拙作『CHAIN／チェイン』で「映っていることだけを凝視する」鑑賞法をぜひ試みていただきたい。当事者である筆者が薦めるという、めったにない機会だ。十八、十九日は上映前に舞台あいさつもする。

ストーリーを追うことが無用になるよう「前説」として概要をまとめておく。幕末という時代背景、「油小路の変」という歴史的事実は借りたが、主人公・山川桜七郎は実在しない架空の人物。故に歴史知識の必要性は皆無だが、補足すれば、現状維持に固執する保守派が、反発を監視する集団・新選組をつくる。管理するのは会津藩。理念が違うと新選組を脱退した者たちは御陵衛士という新たな組織をつくる。御陵衛士の中には新選組から送り込まれた間者（スパイ）・斎藤もいる。御陵衛士と同様の思想に土佐藩もあるが、彼らも最終的には藩の存続維持が最優先、という理解があれば十分だ。

『CHAIN／チェイン』の一場面

想像上の主人公、桜七郎は福島県（会津藩）出身、藩の奨学金を得て京都の最高学府で学ぶが、誤って同士打ちをして以来、組織が対立する「戦い」そのものを否定する。保守派、改革派が将来を思い対立する緊張の中でも、二度と組織には属さず、心底ではあらゆる組織の崩壊さえ望む「個人」となる。組織の掲げる理想を疑い、無思考に組織に属する者は善良と思える者さえ最後には斬り捨てる。何よりもまず「個」として強くあることを自ら体現するための残酷な暴挙だ。心にあるのは「郷里」に残した「不遇な妹」、つまり「福島」と「弱者」のことだけだ。

スクリーンに映る人々をひたすら凝視してほしい。そうすれば、きっと、ラストシーンであなたは胸が張り裂けるだろう。それは、私たち製作者の自戒を込めた「叫び」、もしかすると、あなたの「叫び」となるかもしれない。

（名古屋学芸大教授、映画プロデューサー＝次回掲載は一月二十七日）